

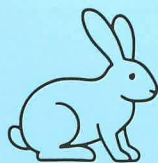
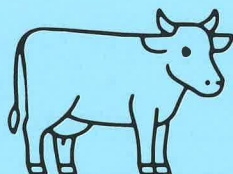
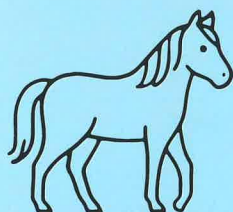
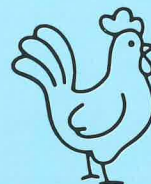
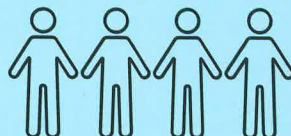
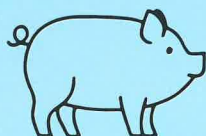


解説資料  




みんな、いきものだ。



令和7年度企画展

いきもの と ひと

令和7年 7月1日(火)  9月15日(月)

ひとは、他の「いきもの」の力を色々な側面から享受し、ともに歩んできました。このことは、遺跡や遺跡から出土する遺物等の痕跡からも明らかで、いきものとの暮らしに関連するたくさんのモノを人間は作ってきたのです。遺跡からはいきものの骨や貝殻が発見されることも珍しくありません。今回の企画展では、「いきもの」と「ひと」が関わりあって営んできた「くらし」とその「すがた」に迫ります。

主催／大分県立埋蔵文化財センター

後援／大分合同新聞社・NHK大分放送局・OBS大分放送・TOSテレビ大分・OAB大分朝日放送

協力／大分県農林水産研究指導センター畜産研究部・大分県立歴史博物館・大分市教育委員会・宇佐市教育委員会



大分県立埋蔵文化財センター

TEL 097-552-0077 FAX 097-552-0700



HP



Facebook

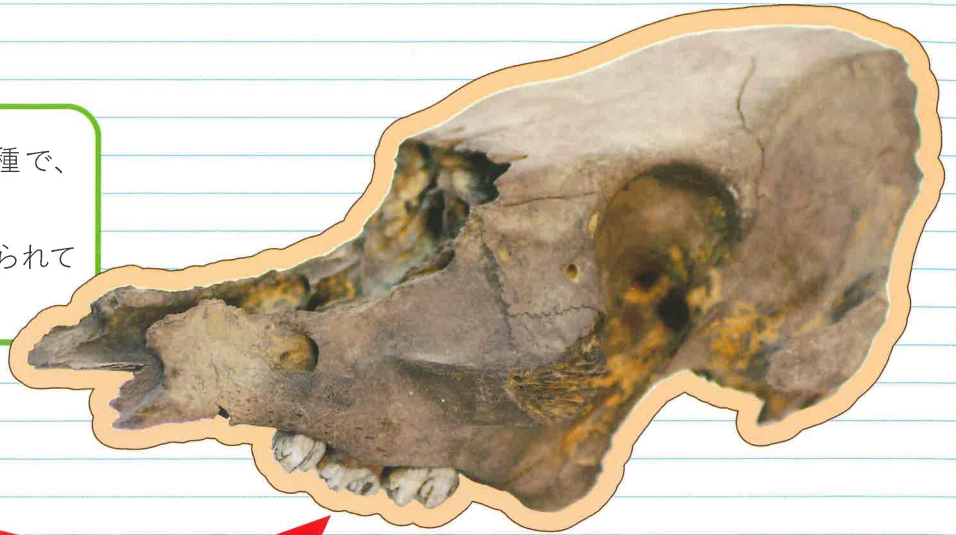


Instagram

○陸・空のいきものとひと

イノシシ/ブタ

イノシシとブタは生物学的には同じ種で、イノシシが家畜化してブタになりました。イノシシは縄文時代から食料として獲られていました。



ブタの特徴

歯周病を患い、歯列が乱れている：ひとに食べ物を与えられた
下顎体から下顎枝の立ち上がり角度が急
短頭化 など

ブタ頭蓋骨

下郡桑苗遺跡（大分市） 弥生時代
大分県立埋蔵文化財センター蔵
「弥生ブタ」と呼ばれるきっかけになった骨です。
歯に歯槽膿漏しそくのうろうがみられます。
泥の中から少なくとも5頭分の骨が良好な状態で見つかりました。

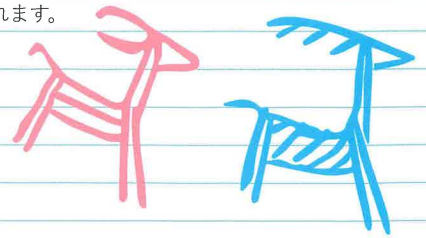


肥前系磁器人形

府内城・城下町（大分市） 江戸時代
大分市教育委員会蔵
イノシシかブタと思われるいきものに笠を携えた人が乗っている様子を模した磁器製の人形です。
イノシシかブタの口部分に穴が空いているため、水注と考えられます。

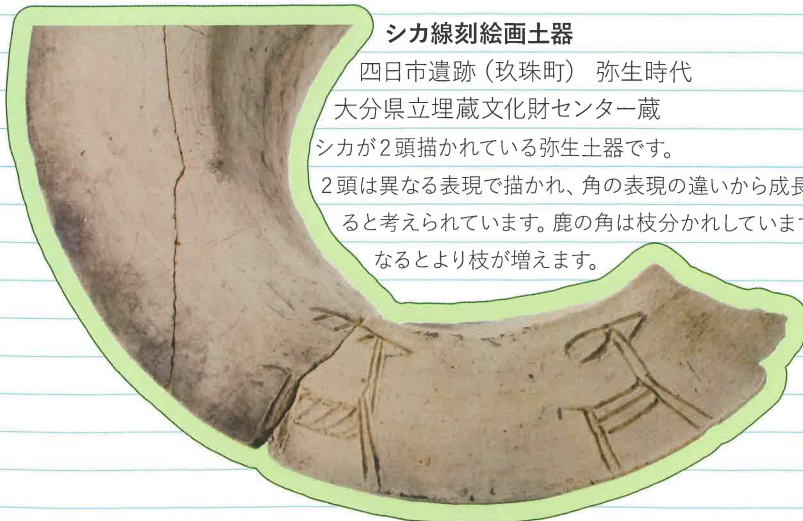
シカ

シカは古くから狩猟の対象で、ひとは食料としてはもちろん、角、皮、骨を利用してきました。神としてまつられることもあります。



シカ線刻絵画土器

四日市遺跡（玖珠町） 弥生時代
大分県立埋蔵文化財センター蔵
シカが2頭描かれている弥生土器です。
2頭は異なる表現で描かれ、角の表現の違いから成長過程を示していると考えられています。鹿の角は枝分かれています。年齢が高くなるとより枝が増えます。



加工痕のある鹿角

横尾貝塚（大分市） 縄文時代
大分市教育委員会蔵
貝塚から出土した鹿角の根元部分です。
斧状の石器で何度も刻み目をつけて角を折り取った形跡があります。



鹿角装刀子

草場第二遺跡（大分市）古墳時代
大分県立埋蔵文化財センター蔵
鹿の角は古くから様々なものに加工して使われています。
刀子の柄として鹿の角を使うこともありました。
お墓の副葬品として棺の中に納められていました。

イヌ



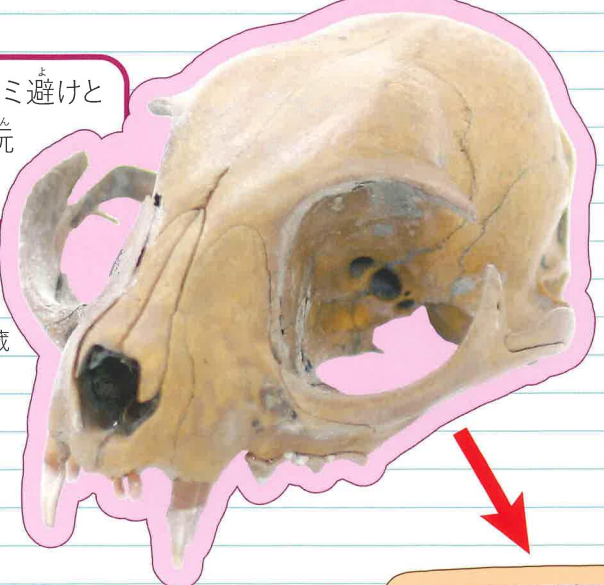
イヌは、一番最初に家畜化されたいきものといわれています。
猟犬、番犬、そして食料にもなりました。今でもペットとして人に身近ないきものです。

イヌ 頭蓋骨

中世大友府内町跡（大分市）中世
大分県立埋蔵文化財センター蔵
称名寺と唐人町の間掘から出土しています。頭蓋骨を割った形跡があり、皮なめしに使ったのではないかとされています。

ネコ

ネコは、弥生時代に日本に来てから、長い間ネズミ避けとして重宝されました。江戸時代以降になると愛玩動物としても多く飼われるようになりました。



ネコ 頭蓋骨・下顎骨

久原第2遺跡（大分市）江戸時代
大分県立埋蔵文化財センター蔵



土製人形

府内城・城下町（大分市）時期不明
大分市教育委員会蔵
毬で遊ぶネコを模した土製の人形です。
顔の表情まで精緻に作られており、かわいらしい一品です。



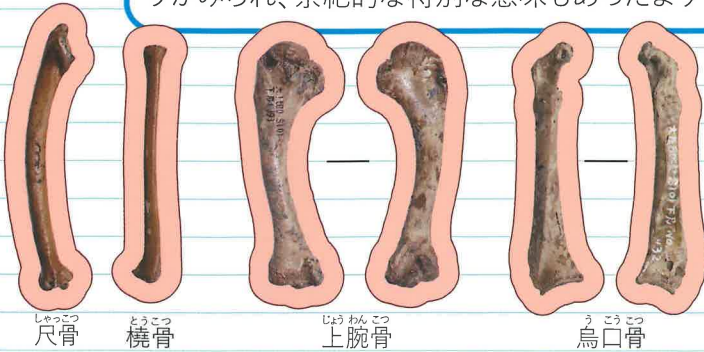
瓦質土器火消し壺

久原第2遺跡（大分市）
江戸時代
大分県立埋蔵文化財センター蔵
久原第2遺跡では、ネコ頭が壺にいれられて埋葬されていました。
このネコはペットとして飼われ、大事に埋葬されたようです。

○陸・空のいきものとひと

トリ

トリは、食料としてだけではなく、古墳時代の埴輪などモノに表れることがあります。古墳時代のいきものの形の埴輪の中では初期からトリがみられ、祭祀的な特別な意味もあったようです。



土製品
古国府遺跡群 (大分市) 古墳時代
大分市教育委員会蔵

鳥形の土製品ですが、頭部しか残っていません。
なんらかの祭祀の結果廃棄されたものと考えられています。
どんな鳥か想像してみてください。

ニワトリの骨

中世大友府内町跡 (大分市) 安土・桃山時代
大分県立埋蔵文化財センター蔵

ニワトリの骨がたくさん出土しています。

様々な種類が持ち込まれ、家畜として飼われたようです。

ウシ

ウシは古墳時代以降に日本に来たといわれています。
日本では農耕に用いるため飼われることが多かったのですが、明治時代以降、肉牛・
乳牛の品種改良が劇的に進みました。



ウシ 頭蓋骨

中世大友府内町跡 (大分市) 安土・桃山時代
大分県立埋蔵文化財センター蔵

堀からウシの頭の骨、胸椎、肋骨がきれいに並んで
発見されました。

頭頂部に丸い孔を穿たれています。



糸竜号角

大分県農林水産研究指導センター畜産研究部蔵
種雄牛「糸竜」の角です。

竹田市久住に所在する畜産研究部では豊後牛の研究をおこなっています。



ウマ 橈骨

中世大友府内町跡 (大分市) 安土・桃山時代
大分県立埋蔵文化財センター蔵

のこぎりで切断された痕跡が残っている骨です。
何かを作るために切ったのでしょうか。

ウマ

ウマは古墳時代以降に本格的に日本で飼育されるようになり、輸送や戦いで重用されました。奈良時代の大分でも官営の牧で飼育されていたことが文献に残っています。

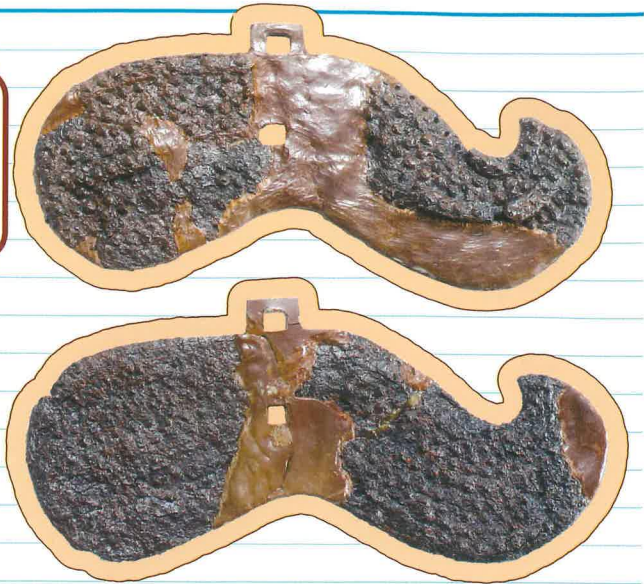


ウマ 上顎骨

蒋山万寿寺跡（大分市） 室町時代
大分県立埋蔵文化財センター蔵

溝の上層から上下逆さまの状態です。

意図的におかれたか判断できませんが、何らかの祭祀もしくは儀礼的な行為に伴っておかれた可能性があります。



馬具（鏡板）

飛山横穴墓群4号墓（大分市） 古墳時代
大分県立埋蔵文化財センター蔵

ひとがウマに乗るときには道具が必要です。鏡板は、ウマに噛ませて手綱をつける轡（くわ）を構成するものです。ウマの顔の両側面に付きます。古墳時代には、馬具をお墓に副葬する流行があり、馬具自体も様々な形のものや豪華なものがあります。

ウマ 戯画瓦

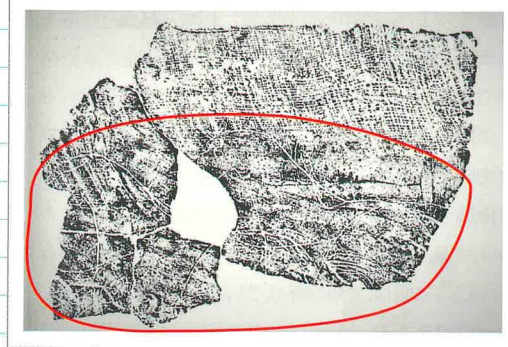
豊後国分寺跡（大分市） 奈良～平安時代

大分市教育委員会蔵

ウマの絵が描かれた平瓦です。

2頭が並んで簡素に描かれており、馬具の表現もあります。

今は残っていないですが、左側に手綱を握ったひとがえがかれていたのかもしれない。



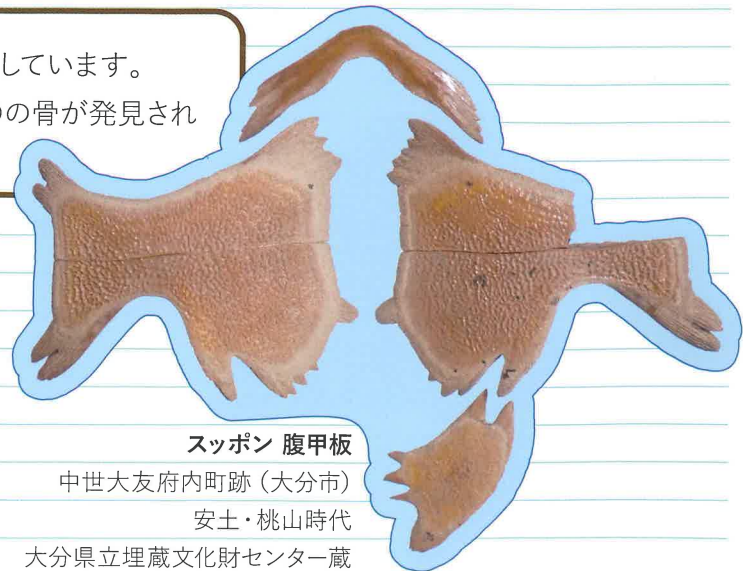
拓本

その他のいきもの

中世大友府内町跡の調査では、多くの動物骨が出土しています。称名寺近くの堀の唐人町側からは多様な種のいきものの骨が発見されました。

ウサギ 下顎骨

安土・桃山時代
大分県立埋蔵文化財センター蔵



スッポン 腹甲板

中世大友府内町跡（大分市）
安土・桃山時代
大分県立埋蔵文化財センター蔵

○海・想像上のいきものとひと

道具

ひとは、いきものを食べ、素材を生活に利用してきました。
非常に多くの道具を駆使するのはひとの特徴です。

石鏃

横尾貝塚（大分市）縄文時代
大分県立埋蔵文化財センター蔵
狩猟で獲物をとるためのやじりです。
当初は黒曜石などで作られていましたが、
弥生時代後期以降から本格的に
鉄で作られるようになります。



歯ブラシ

戸室石丁場跡（臼杵市）大正～昭和時代
大分県立埋蔵文化財センター蔵

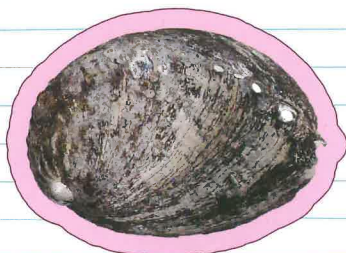
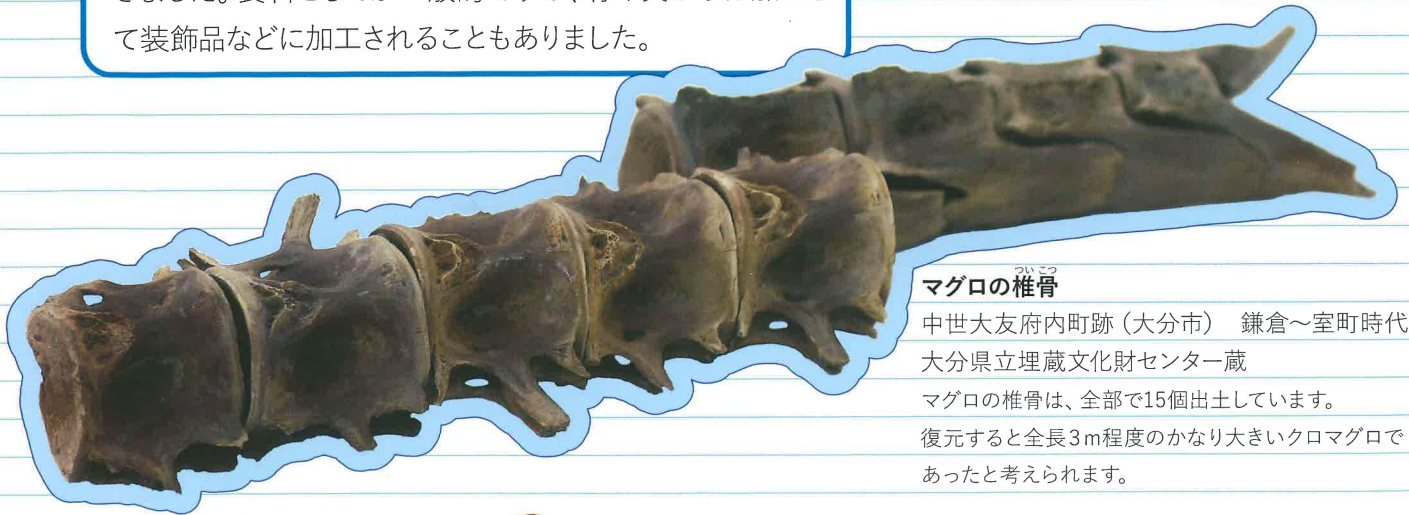
動物の骨（ウシか）でできた歯ブラシです。今はプラスチックで
作られていますが、戦前まではウシの脛骨（ひざこ）で作られてい
たようです。ブラシ部分の毛はブタの毛が使われていました。

海のいきもの

海に囲まれた日本では、たくさんの海のいきものも利用して
きました。食料としてが一般的ですが、骨や貝がらは加工し
て装飾品などに加工されることもありました。

マグロの椎骨

中世大友府内町跡（大分市）鎌倉～室町時代
大分県立埋蔵文化財センター蔵
マグロの椎骨は、全部で15個出土しています。
復元すると全長3m程度のかかなり大きいクロマグロで
あったと考えられます。



クロアワビ



サザエ



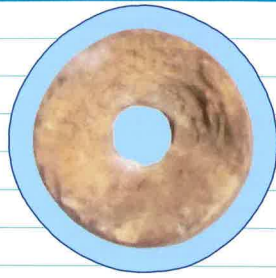
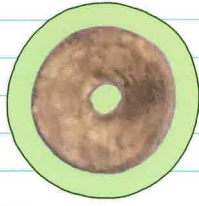
ハマグリ



キサゴ

貝類 中世大友府内町跡（大分市）安土・桃山時代 大分県立埋蔵文化財センター蔵

中世大友府内町跡から出土した貝の中で数が多いものを4種ピックアップしました。今でも食べる貝が中世でも多く食べられていたのです。



骨角製品（イルカの歯、魚の椎骨）

横尾貝塚（大分市）縄文時代

大分県立埋蔵文化財センター蔵

穿孔されたイルカの歯と魚の椎骨です。

紐を通して身につける装飾品だった可能性があります。

タコ壺

野田遺跡（中津市）平安時代

大分県立埋蔵文化財センター蔵

タコ壺は、タコをとるための壺です。

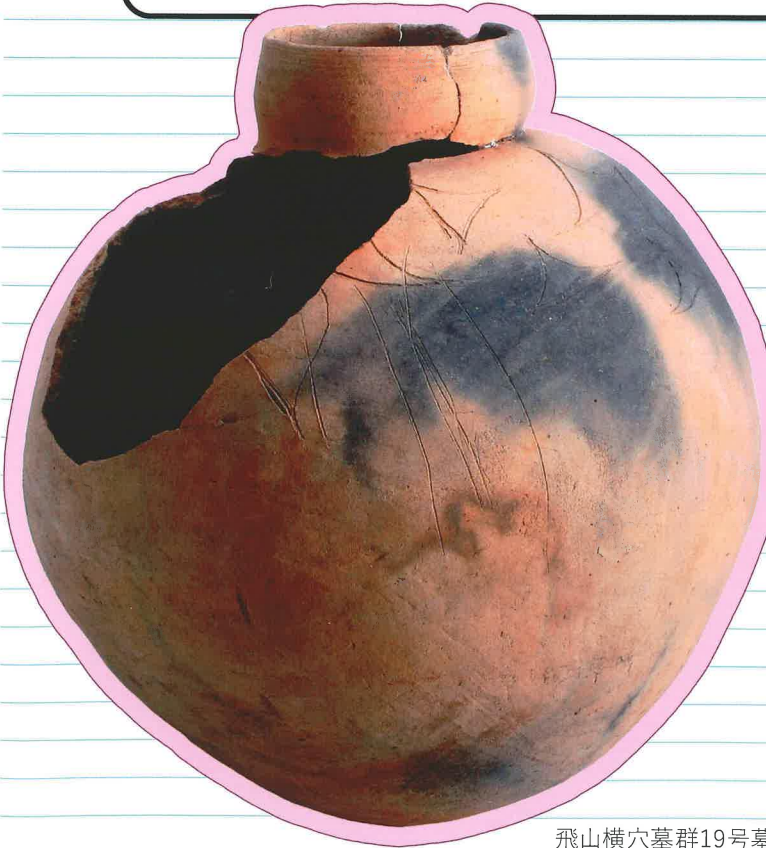
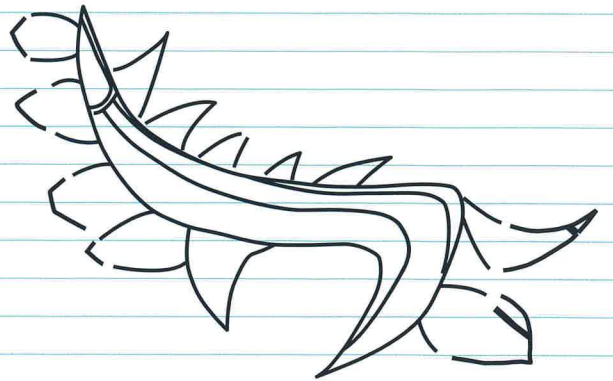
タコは穴に隠れる習性があるため、

弥生時代以降、このような特殊な土器がつけられました。



想像上のいきもの

ひとはいきものを創り出すこともあります。想像上のいきものは実在しませんが、モノのモチーフに用いられることがあります。龍や麒麟、玄武など様々ないきものがいます。



絵画土器

東田室遺跡（大分市）古墳時代

大分県立埋蔵文化財センター蔵

大分県指定
有形文化財

龍と思われる絵が線刻で描かれている土器です。

曲線と三角・四角など簡単な図形で描いてあります。

龍は弥生時代以降に中国から伝わりました。

紡錘車

飛山横穴墓群19号墓（大分市）古墳時代

大分県立埋蔵文化財センター蔵

糸を紡ぐために使う石製の道具です。

紡錘車の表面に線刻でいきものが描かれていますが、

亀の尻尾に蛇が生えているように見え、玄武の可能性が指摘されています。

古代中国の四神の一種で北を守る神です。



いきものと(しての)ひと

ひともいきものです。いろいろなモノを作るのはひとですが、その姿が墓で発見されることもあります。骨や副葬品からどんな生活をしていたか、社会的地位だったかわかる場合もあります。



外耳道骨腫のあるヒト頭蓋骨(複製)

白塚古墳(白杵市)古墳時代

大分市教育委員会蔵

外耳道骨腫は、冷たい水に潜ることが多い人にみられる耳の穴にできる骨の特徴です。このことから、生きていたときに海に潜る習慣があったことがわかります。

2つの石棺から男女2人ずつ計4人埋葬されていましたが、外耳道骨腫は全員に確認されました。



貝輪

長湯横穴墓群7号墓(竹田市)古墳時代

大分県立埋蔵文化財センター蔵

長湯横穴墓群7号墓から出土した貝でできた腕輪です。

ゴホウラという南海産の貝でできており、貴重な品を手に入れることが出来た人のお墓であることがわかりました。

大分県指定
有形文化財

いきものをとむらう

ひとはいきものをとむらいます。縄文時代からいきもののお墓は確認されており、お墓に埋葬するだけでなく慰霊碑、供養碑も作られます。いきものへの気持ちはもちろん宗教の影響もあります。

大分県内にもいくつか様ないきもの慰霊・供養碑が残っています。

「ひと」の「いきもの」へのまなざしも時代を経て変化していきます。これからまたどのように変化していくのでしょうか。

大分県にあるいきものの供養塔例

名称	所在地(住所)	時代
猪・鹿供養塔	日田市小野市木	江戸(1812)
猪・鹿供養塔	日田市小野市木	江戸(1866)
猪・鹿供養塔	日田市小野市木	江戸
江海魚鱗離苦得楽塔	佐伯市米水津宮野浦、迎接庵	江戸(1720)
江海魚鱗離苦得楽塔	佐伯市蒲江浦、東光寺	江戸(1722)
江海魚鱗供養塔	佐伯市西上浦内之浦、海光庵	江戸(1740)
鯨王魚鱗供養塔	佐伯市大入島区高松浦、大休庵	江戸(1766)
魚鱗塔	佐伯市晞干区、地藏庵	江戸(1755)
蝗衆虫供養塔	佐伯市弥生町大坂本	江戸(1750)
大鯨魚寶塔	白杵市大泊	明治(1871)
鮑栄螺海鼠供養塔	白杵市風成	大正(1917)
貝之供養塔	白杵市津留、松ヶ鼻地藏公園	昭和(1982)

依田賢太郎 2018『いきものをとむらう歴史』社会評論社を参考に作成



貝之供養塔 白杵市津留、松ヶ鼻地藏公園